

遅くなりりましたが、第八号の解答解説編です。さあ、みなさん、正解にたどり着けましたか？

とりとりの花 とりとりの歌

あぢさゝみやきのふの手紙はや ぶ 橋本多佳子

三句はいずれも季節の花紫陽花しかも皆女性の作

あぢさゝみや逢はば もの言はむ 細見綾子

最初の空欄には漢字二字、次は形容詞次も漢字一字

紫陽花に佇んで 濡らしけり 黛まじか

これらを考える時、花の特性と花言葉が参考に。紫陽花は土の酸度により花色が変わる。花色そのものが変化していくものも。そこから変わり易い心「移り気」花色自体から「冷淡」の花言葉も。何れの句も叙情に満ち、男では終ぞ詠めぬ世界を詠出している。誤答例：滅冷たく類

さて、正答に辿り着けるかな？ 正答と鑑賞はHP版で。

夾竹桃 の日をさりげなく 平畑静塔

もつすく訪れる。片仮名四字。戦争悲惨 静寂平和？ (川東碧梧編)

正解は「古」。紫陽花は移り易い花。花言葉もそうでしたね。作者橋本多佳子は杉田久女、山口誓子門下で、水原秋櫻子の「馬酔木」同人。戦前より大阪の帝塚山に住まう。女性の視点から女性独特の微妙な心情、哀しみ、不安、自我等を詠み込んだ。戦後、西東三鬼、平畑静塔、秋元不死男らと出会い句境を深めていく。この作品も、誰からの手紙だろうか、作句の年がわからないから作者の環境が読めない(無論作者を離れて鑑賞してもよいのだが、夫からの詫びの手紙だろうか、恋人からのものだろうか、「はや古ふ」の表現に心境の変化、手紙の主との関係性の変化が端的に込められていて、秀逸。「古ふ」という言葉の選択も面白い。「古びた〇〇」との言い回しはよくあるが、「古ふ」と言い切る形は知らない。作者は置いて、それを離れても面白い句である。普遍性がある。あなたにもこういう経験はありませんか？と問うてくる力がある。優れた文学作品の証左。「雪はげし抱かれて息のつまりしこと」夫を亡くして12年後の作。何ともはや、情熱の俳人である。「し」はいつの過去か？今は亡き桶節子先生(誓子門下)に多佳子女史生前の逸話を聞いた事がある。四女美代子も俳人。「わが金魚死せり初めてわが手に取る」そう言えば死ぬまで触れ合うことはないよなあ。感覚というか作句のセンスが、親子で実に似た所がある。

二つ目は「すずしく」です。冷たくでないのがミソ。これも関係性が容易に。夫婦？ 恋人？、何かあったんでしよう、熱く物言うべき事が。紫陽花の花色と女性の心が重なって、花を見ながら冷静さを保つ、とても言えはいいのでしょうか。「怖い、怖い」あなたもこういう経験はありませんか？ ですよ。細見綾子も大阪にゆかり戦前から20年余池田市に住まう。「そら豆はまことに青き味したり」「チューリップ喜びだけを持つてゐる」「ふだん着でふだんの心 桃の花」がいい。代表句。句は写生に徹しつつも、主情的、直感的な面を持つ。

三つ目は「胸」です。頬じやないんです。それこそ、何があったんでしよう？ でも情緒というか、趣というか、ありますね。(ただ、これはオトコの感覚かも) 作者の黛まじかは、現代の俳人。62年生まれなんで、私より若いっ！ 生きてる人をこのコーナーで紹介するのは稀。恋の歌が多い。でも、歌い方が卓抜。「紫陽花に佇んで」で、景が鮮やかに眼前に現れる。そして「胸濡らしけり」だっ。いやあ、一本も二本も取られたでしょう。こんな句もある。「会いたくて逢いたくて踏む薄氷」どうです。季語を詠み込まなければならぬという俳句の宿命を逆手に取って、「薄氷」という季語を比喻として使う！ しかも、「あう」の漢字の使い分けっ。「会いたくて」は真情、そして「逢

いたくて」は恋人同士の「逢瀬」を意味してますね。巧みですなあ。こうなりや寧ろ、匠ですなあ。そして「薄氷」ですから、薄氷を踏む思いで逢う、ですから、密やかな恋でしょうか、禁じられた恋でしょうか。それを「敢えて」踏む、という状況・心情が行間から読み取れますね。これを二十代の前半で詠んだというんですから……。「梅檀は双葉より芳し」ですなあ。因みに父上の黛執(しゅう)氏も俳人で、でも句風は全く異なります。「もの忘れするたび仰ぐ春の山」近頃身に迫ってます。「もの忘れ」は負の要素で、「春の山」はプラスです。もの忘れにがっかりする心を、春の山を仰いで恢復する、ということでしょうか。老境の、しかし悲嘆に暮れない大らかな心があつていいですね。励まされる句です。こんな句も。「軒下といふ冬を待つところかな」「軒下といふ」「冬を待つ」のいずれもが「ところ」に掛かります。厳しく寒い冬を前に、鉢植えを軒下に移動させている所でしょうか。その軒下を「冬を待つところ」と詠んだのに心惹かれます。本格的な冬が来る前に、出来るだけ沢山陽を浴びて栄養を蓄えとけよ、という思いでしょうか。何れの句にも静やかな優しさが籠っています。恋歌の俳人とは対照的です。

さて最後です。正解は「ピカドン」。ピカドンの日もではなく、「ピカドンの日をさりげなく」と詠んでいます。どう違うのでしょうか？ そう、取り立てているのです。原爆の落ちた日をどうしているか。人間はその日を特別の日として迎えます。しかし、自然は変わらず、心情もなく、淡々として花を咲かせている。その自然の変わらぬ営みと、ピカドンという愚かな人間の所業を対照させている、と見ます。夾竹桃

という真夏を象徴する花に、ピカドンを重ね、この句を読む者に様々な事を想起させる。静かな十七文字の中に、原爆への抗議が込められています。作者は精神科医で大阪にゆかり深く、戦後15年程、大阪の大学や病院に勤務した。東大阪の阪本病院の院長も勤めた。代表句「一本の道を微笑の金魚売り」「我を遂に癩の踊の輪に投ず」「徐々に徐々に月下の俘虜として進む」やつと上がりました、追加原稿。お待たせしました。原爆投下の日に間に合つてよかったです。